

## 80 歳以上においては収縮期血圧 129mmHg で死亡リスク最低

中国において、80 歳以上の高齢者を対象に収縮期血圧と全死因死亡リスクとの関連について、コミュニティベースの長期前向き試験を実施し検討した。

対象となったのは中国 22 省に居住する 80 歳以上の超高齢者 4,658 例(平均年齢 92.1 歳)で、3 年間追跡した。追跡期間中の死亡は 1,997 例であった。収縮期血圧値、平均動脈圧、脈圧と死亡率には Uカーブの関連がみられ、それぞれ 143.5mmHg、101mmHg、66mmHg で最も死亡リスクが低かった。共変量で補正すると、収縮期血圧値のみが死亡率と Uカーブの関連を示し、129mmHg で最も死亡リスクが低かった。129mmHg を基準として、収縮期血圧が 107mmHg より低値では全死因死亡リスクは低下した(ハザード比:1.47 から 1.08)。一方、154mmHg より高値では、数値が上がるにつれて全死因死亡リスクは上昇した(ハザード比:1.08 から 1.27)。死因別分析では、収縮期血圧が中程度(107~154mmHg)に比べ、154mmHg より高いと心臓血管死のリスクが上昇し、107mmHg 未満では非心臓血管死リスクが上昇した。

したがって、80 歳以上の超高齢者では、収縮期血圧値と全死因死亡リスクとの関連は Uカーブを示し、収縮期血圧 129mmHg で死亡リスクが最低であることが示された。また、収縮期血圧 154mmHg より高値では心臓血管死リスクが高くなり、107mmHg 未満では非心臓血管死リスクが高くなることも示唆された。今回の結果により、超高齢者においては高血圧治療の再検討が必要であることや、この年齢層のガイドラインの検討が必要であることが強調された。

出典: British Medical Journal. 2018 Jun 05; 361: k2158.